

北朝鮮の山奥にある「強制収容所」をなくすため、多くの人びとに呼びかけています。

nf-staff@netlive.ne.jp



<http://nofence.jp>

VOL. **31**

2014年9月

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 【郵便振替口座】NO FENCE / 00180-1-707147

**I N D E X**

覚せい剤（ヒロポン）が中学生にまで広がる・小川晴久	.....	2
「ケリー氏が北朝鮮強制収容所の即時閉鎖を要求」・『聯合ニュース』（木村亮訳）	.....	3
鹿児島映画館はゴージャス？・並河真知子	.....	4
北朝鮮政府による非合法的経済活動・恩智理	.....	7
台湾の旧政治犯収容所・荒井正人	.....	10
北朝鮮、「朝鮮人権研究協会」の報告書を発表・李恩元	.....	11
強制収容所を前面に出す運動が必要・小川晴久	.....	12
『北朝鮮の人権問題にどう向きあうか』が私の心にしみた理由・パク・ホミ	.....	14

**『北朝鮮の人権問題にどう向きあうか』**

小川晴久（NO FENCE 副代表）著

定価 本体 1,800 円＋税

大月書店（2014/8/22）

“人道に対する罪”を止めるために。

人権侵害の実態はどのようなものか。

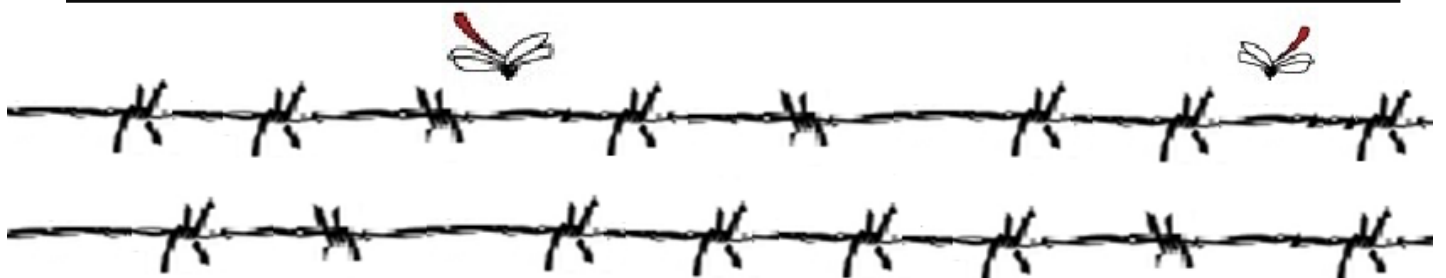
国際社会はどう動いているか。

日本人たちはどう考え、何をすべきか。

「魂をゆさぶる良書。現代に類を見ないこの体制  
に向きあう責任と希望。」

推薦・土井香苗氏

（ヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表）



# 覚せい剤（ヒロポン）が中学生にまで広がる ——金仁星さんを囲む会報告——

副代表 小川晴久 

去る8月31日（日）午後3時から2時間半、たまたま私用で来日されていた韓国のNGOで脱北者調査機関NKDB(NK データベース、理事長金尚憲氏)の若き調査員金仁星さん（34歳）から、最新の北朝鮮人権状況を聴くことが出来た。

## 一、強制収容所について

新しい収容所が出来たと言う情報はない。むしろ内陸部へ移動する（中国への警戒か）。（例）会寧22号は解体して江原道（鉄原など）へ移した。

18号管理所は2006年から炭鉱地帯に変わる。200世帯は价川管理所へ。

炭鉱地帯は2009年以降資本主義的経営に（北倉炭鉱連合企業所）。しかし最近炭鉱地帯の人を他所に移す。鄭成沢一派（粛清者）をそこに入れるため？

## 二、国連COI報告書の影響

国連COIが大量餓死を国家犯罪（成分によって配給量を変えたこと）と立証したことに北朝鮮当局は驚く。国連COI報告書後、重大事件でない場合は、取り調べで殴る蹴るをするなという指示が出ている。公開処刑の数も減っている（ただし非公開処刑に回しているだけ）。

（小川注：9月13日に発表された北朝鮮当局の人権報告書では国連COIを口汚く罵っているので、COI報告書が北に良い影響を与えているとはとても思えない。）



金仁星さん（右）



### 三、麻薬（覚せい剤）が北朝鮮社会に広がっている

この麻薬はケシや大麻で作った麻薬ではない。ヒロポン（化学合成でできた覚せい剤）である。1990年代後半の洪水でケシや大麻の栽培が打撃を受け、北朝鮮は中国から原料を輸入し、安くヒロポンを作り始めた。ヒロポンをやると疲労を感じずに仕事ができる。空腹も感じない。薬もないので薬の代わりにする。そこで保衛員や警備隊員までヒロポンをやることになる。中学生まで広がっていると言う。当然健康は害される。当局は厳しく取り締まっているが、取り締まる側まで広がっている実態なので、深刻な問題になっていると言う。特に国境沿いの会寧は人口の5割から7割が、茂山では3割から5割が、恵山では1割から3割が使用していると言う。密売人は普通の人々の1か月の収入を1日で稼げるので後を絶たない。（今回聞いた中で一番のショックな話）

### 四、人民に対する統制は教化されている

人民班に副班長が設けられた。 (了)

## 「ケリー氏が北朝鮮強制収容所の即時閉鎖を要求」

『聯合ニュース』（ワシントン、8月13日）

世話人 木村亮訳 

米国国務長官のジョン・ケリー氏は水曜〔8月13日〕、北朝鮮に向けて、政治囚収容所をすぐに閉鎖するよう強く迫った。このような人権侵害は「21世紀にあってはならない」と話した。

ケリー氏は、ハワイにあるイースト・ウエスト・センターでおこなったアジア政策についての講演のなかで、この言及をした。東南アジアなどの諸国と毎年おこなっている会談のためのミャンマー訪問や、年次の安全保障会談のためのオーストラリア訪問を含む、アジア太平洋地域での遊説を終えるにあたっての講演であった。

ケリー氏は、北朝鮮の核拡散行為が「とても深刻な脅威を米国、周辺地域、世界に突きつけている」と発言し、米国は北朝鮮の核搭載弾道ミサイル追求を抑止し身を守るための措置を講じていると話した。

「しかし誤解してはなりません。私たちは、恐ろしい人権状況のことも訴えているのです」とケリー氏は言った。「私たちは、北朝鮮における強制収容所と処刑のシステムの異様な残忍さを明らかにした、今年の国連の並外れた調査を強く支持します。」

「人間の尊厳をこのようにして奪う



ことは、21世紀にあってはならないことです。北朝鮮の収容所は閉鎖されるべきです。それも明日にではなく、来週にでもなく、今すぐに。私たちはこの問題について訴え続けます」とケリー氏は述べた。

ケリー氏は、米国は「アジアに人権と民主主義を促進し続けます。傲慢にはなりません、しかし及び腰にもなりません」とも話した。

北朝鮮は長年、世界最悪の人権侵害者のひとつと見なされてきた。その共産主義体制は異議を容赦せず、何十万人もの人々を国中の政治囚収容所に収容し、また国外に関する情報を厳しく統制して

きた。

2月、国連の調査委員会〔COI〕は北朝鮮の人権事実について、1年ほどの精査を経て報告書を発表した。報告書は、北朝鮮の指導者は「広範で体系的かつ大規模な」人権侵害に対して責任があると述べている。

報告書は、国際刑事裁判所が北朝鮮の「人道に対する犯罪」に対処すべきだとも述べている。

北朝鮮は人権状況に関するあらゆる議論に対して怒りを表明し、それはわが体制を覆すために米国が主導している企てだと言ってきた。

【『聯合ニュース』、チャン・ジェスン】

## 鹿児島島の映画館はゴージャス？

世話人 並河真知子 

「あら並河さん！ こんなところで何してるの？」

ガーデンズシネマ入り口のドアが開き、映画を観に来た人たちが中に入ってくる



や、すっとんきょうな声があがった。見るとその人は、かつて私の子どもたちにヴァイオリンを教えてくれた先生であった。

「あらまあ先生、先生こそ、こういう映画をご覧になるんですか？」

「ほら、あなたが前に言ってたでしょう、北朝鮮のこと。だから私、本を読んだのよ。あ、これこれ、この本」と、目の前に並べてある

『北朝鮮脱出』の文庫本を指さす。その声に誘われて、狭いロビーで映画の半券をちぎってもらおうと並んでいる人たちの視線が、赤と黒の表紙に吸い寄せられる。

「しめしめ、いい宣伝になる」。私は内心ほくそえんだ。

その先生とのつながりはもう十数年も前のことで、どういう話をしたのか記憶はないのだが、これは今回の企画が呼んだ嬉しいハプニングであった。

私と宋允復事務局長は、鹿児島県のデパート、マルヤガーデンズの中にある映画館でおこなわれた「北朝鮮強制収容所に生まれて」の上映に際して感想会の企画を立て、そこで書籍の販売やチラシの配布もした。

感想会は8月16日(土)、17日(日)の2日間、それぞれ2回の上映後に開かれた。上映前には宋さんが壇上に立ち、一つ一つの小さな行動が歯車となって回りやがて大きな歯車になることを、15分ほどの時間をかけて切々と訴えた。計4回の集まりであったが、ランチをとったりお茶を飲んだりしながら全部で30人ほどの方とお話することができた。



「申東赫さんは強い男だ!」「思ったよりグ

ロテスクな場面がなく、静かな映画だった」「最後の言葉が、複雑な気持ちだった」

「アニメの色調と動きが、収容所の雰囲気を出している」「小学校で社会を教えていて、知っていなければと思って観に来た」「おばあちゃんが韓国の人にとっても良くしてもらったことを聞いて育った」など、さまざまな感想や意見が語られた。

今回いちばん印象的だったのは、小さな点が線でつながる喜びである。脱北者支援かごしまの面々、ガーデンズシネマの黒岩さん、申東赫さんが来鹿の折に証言集会に参加された方たちの気持ちが、1本の力強い線となってつながったのである。全39席のミニシアターが6日間で200人ももの来場者を迎え、大盛況だった。今回見逃した人たちのために、再上映の予定もあるようだ。





50年間も続く収容所の実態に、ややもすると無力感におちいり、何をしても全て無駄に思えることがあるが、今回の上映会では元気をもらった。なにより、たくさんの方と交流し知りあうことができたし、楽しかった。願わくば全国の映画館でも企画してほしいものである。

ただ「奇跡」の一言では語りつくせない東赫さんの脱出劇を考えると、私たちに課せられた役割は、決してあきらめず、



持続して、各人が小さな点をつくることであるように思う。それがやがて大きな線につながり、波のよううねりとなることを想像しながら。

そのような東赫さんへのサポートは私たちの責務であろう。心的外傷後ストレス障害(PTSD)の悪夢に襲われながらも、各国で収容所の実態を訴えている彼の意思に沿うためにも……。

この2日間、小川晴久副代表の新著『北朝鮮の人権問題にどう向きあうか』は、映画を観に来た人たちの耳目を集めた。書店に並ぶ前のホカホカできたての本は、上映日前日に鹿児島に届き、まさにタイムリーだったと感謝している。

宋さん、ハードなスケジュールをこなしていただき、ありがとうございました。

＊ 映画上映期間中に売れた本

小川晴久『北朝鮮の人権問題にどう向きあうか』10冊(完売!)

姜哲煥・安赫『北朝鮮脱出』上下、4セット

北朝鮮人権第3の道『北朝鮮全巨里教化所——人道犯罪の現場』1冊



# 北朝鮮政府による**非合法的経済活動**

会員 恩智理 

北朝鮮人権委員会(Committee for Human Rights in North Korea, HRNK)はご存知の通り、デビッド・ホーク氏の『北朝鮮 隠された強制収容所』(The Hidden Gulag)を出したことで知られる NPO です。ここから「非合法：国際通貨を得るために進化しつつある北朝鮮」(Illicit: North Korea's Evolving Operations to Earn Hard Currency)という論文が 4 月に出ています (HRNK のホームページ(www.hrnk.org)からダウンロードできます)。著者はシーナ・チェスナット・グライトズ(Sheena Chestnut Greitens)という研究者です。最近の北朝鮮国内の情勢の変化について触れたものです。

論文は 100 ページ以上にも及ぶもので、まだ目を通すことすらできていませんが、作者であるグライトズ氏は自分の所属するブルッキングズ研究所が主催した「北朝鮮政府による非合法的経済活動」(Illicit Economic Activities of the North Korean Government)というパネル・ディスカッションでもメインの発表をしています。そのパネル・ディスカッションの内容は下のリンクからダウンロードできます。

<http://www.brookings.edu/~media/events/2014/04/15-north-korea/north-korea-economy-greitens-transcript-final.pdf>

こちらの方が短くて読みやすいです。



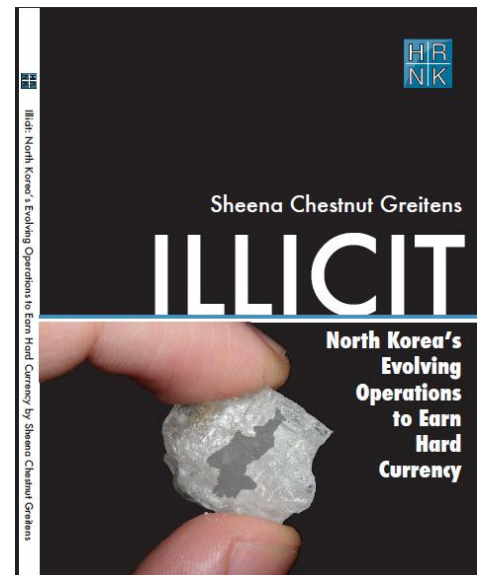
この内容を紹介したいと思います。但し以下は内容を私なりにまとめたものであり、逐語訳ではないこととお断りしておきます。適宜説明を補った箇所もあります。



北朝鮮が関与した非合法活動には時期的に分けて **3つの段階**がありました。

最初の段階は 1970 年代半ばから 1990 年代半ばまで。北朝鮮政府当局が非合法的な製品の売買に関与した時期です。

第 2 段階は 1990 年代半ばから 2000 年代半ばまでで、非合法的な製品の大量生産が当局の手で行われました。但し売買は犯罪組織に任されました。



Sheena Chestnut Greitens, *Illicit: North Korea's Evolving Operations to Earn Hard Currency* (Apr 15, 2014)  
Copyright © 2014 by the Committee for Human Rights in North Korea

第3段階は2005年から今に至る時期です。非合法的な活動はこれまで北朝鮮当局が一手に引き受けてきたわけですが、2005年頃から民間人がかなり関与するようになりました。

この3つ目の変化が起こったのには、**3つの要因**が考えられます。

1つ目は、配給システムが崩壊したため起こった、北朝鮮自体の市場化です。

2つ目はアメリカを中心とする国際社会による経済制裁に対する反応です。

3つ目は2011年まで指導者だったキム・ジョンイルの存在です。

そしてこの変化には**3つの特徴**があります。まず、朝鮮半島と中国の東北地方だけで起こっているということ。更に、当局の関与の度合いが減り、逆に民間人の関与が増えていること。最後に、偽札の印刷や麻薬の運搬などの活動を当局が行っているという証拠が比較的少ないということです。

この変化に対し、**2つの解釈**がありえます。

このような非合法的活動がなくなった、とする解釈。もう1つは、当局が関与する非合法活動が目立たなくなった、とする解釈です。

どちらが正しい見方か、現状では最終的な判断をするのが難しいと言わなければなりません。しかし、非合法活動に関与する普通の北朝鮮人が増えているのは確実です。

但し、これらの北朝鮮市民が、非合法貿易に関与することで経済的に潤うようになったというだけではありません。非合法活動によるマイナス面（具体的には麻薬中毒など）が北朝鮮社会に以前よりも広がりつつあるということをも意味します。

北朝鮮当局には8種類の収入源があると考えられます。非合法的な活動・武器の不正売買・開城工業地区・外国との貿易（韓国・中国・ブラジル・オランダなど）・観光業・労働者の輸出（2000年代半ば頃から増加しました）・外国からの仕送り（日本からの額は最近激減しました）、それから国内の経済活動に対する非公式的な課税（携帯電話の販売や課金など）です。

北朝鮮には**2種類の活動**があると考えられます。1つは直接、北朝鮮当局が行い、その利益になる活動。もう1つは、まず北朝鮮国民が行い、その利益になる活動で、北朝鮮当局はそのお金を吸い上げるよう努めています。

非合法的な活動は、以前この最初の活動、当局が専ら行う活動の中に入っていました。今や以前よりも、この2番目の活動として行われることが多くなりました。



このような北朝鮮の変化に対して、我々はどのように対応すればよいでしょうか。3つのことが考えられます。

まず1つ目です。近年、北朝鮮の経済はよくなってきています。この2年間でも、確実に成長を遂げています。北朝鮮で用いられている動機づけのシステムが恐らく変化したのです。それゆえ、政策立案に当たっては、以上のような変化を理解した



上で考えて行くことが必要だということです。

2 点目です。北朝鮮は高い適応力を持つ国です。だから北朝鮮で何が起きているかを積極的に調査・研究することが重要だということです。そうしなければ影響力を行使できません。

3 点目です。北朝鮮当局の果たしている役割が以前よりも分りにくくなって来ています。そのため、不法な活動がなされているという前提で行われてきた経済制裁も、続けることが難しくなっています。つまり、北朝鮮国内のお金の流れに関する更なる情報収集が必要であるということです。

注意すべきことは、非合法活動が第3段階に入ったことで、麻薬中毒者の増加など、これまでなかった問題が生じつつあるということです。北朝鮮当局はこれに十分対応していません。NGO や国際組織が対応しているという話も聞きません。これは北朝鮮の国内だけの問題ではなく、韓国の脱北者に対して治療等を行う必要があるということでもあります。

悲観的な結論になってしまいましたが、もう少し明るい見通しがあることについてもあえて触れておきたいと思います。

北朝鮮当局は今、国民の経済活動から得られる収入に以前よりも依存するようになったと見てよいようです。様々なレベルで、国民が生み出す経済力と、北朝鮮当局の政治力とが共存するようになってきています。国民と当局は相互に依存しているわけです。

北朝鮮がこれまで存続してきたのは、孤立と経済的窮乏生活とを多くの国民に強いつつ、この政策から生じる損害を自分では被らないようにしてきたためです。しかし今、同じことを続けるのは難しくなってきたように見えます。

市場経済が発達してきたために、政権と社会との間にスペースが生じて来たようです。そのため、政権を介することなく、北朝鮮国民と直接関係を持つことによって、北朝鮮の政権に圧力を掛けることができるようになるかも知れません。

米ソの冷戦時代に「封じ込め政策」を考案したジョージ・ケナンは、自分の考えを説明する際に園芸を喩えとして使っていました。そして、しかるべき方向に物事が進んで行くようするには、どのような状況を作ればいいのか考えました。彼はソ連を、内的な矛盾から生じる圧力のために歪んだ形になってしまった木に喩えました。そしてソ連の体制に対する最も大きな圧力は、ソ連自身が作り出した矛盾から最終的には来るだろうと考えていました。

北朝鮮においても、今後まだどうなるか分からないし長期的なものにはなるだろうが、内からの変化が起こり始めている可能性があるのです。我々はその邪魔をしないように気を付けなければなりません。

# 台湾の旧政治犯収容所

世話人 荒井正人 

台湾は戦後、大陸より蒋介石が来て、独裁政治を布きました。

蒋介石側が犯した犯罪、「二二八事件」「白色テロ」などは、今では観光ガイドにも載っていますが、戦後38年間の戒厳令のあいだ、「政治犯収容所」もありました。

それは太平洋側に浮かぶ緑島（1949年までは旧称火烧島）にあり、現在は観光地として一般に公開されているようです。



(<http://www.u-piccc.com/taiwanidentity/index.html>)

私は去年5月に、映画『台湾アイデンティティ』を試写会で観て、この政治犯収容所を知りました。この映画には、当時の収容所の様子を撮影したフィルムが、僅かながら出てきます。観ると、囚人たちの暮らしぶりは、北朝鮮のそれに比べ、まだ牧歌的なものです。宿舎にはギターもありました。あまり重労働はしない印象を抱きました。

映画に出てくる、この収容所に入った人は、台湾独立派の冊子を日本語に翻訳しようとして、「反乱罪」で逮捕されました。当時は日本語を使うだけで罪とされました。

この映画『台湾アイデンティティ』は一連の全国公開が終ったところでも、酒井充子監督の前作『台湾人生』と同じくロングランとなり、各地方、方々の映画館で観られることでしょうかから、機会があったら是非観てください。

## 会報の原稿を募集します

「NO FENCE」では、年に6回（1・3・5・7・9・11月）会報を発行しており、会報への原稿は随時募集中です。

- ・北朝鮮強制収容所体験者の本を読んで感じたこと
- ・「NO FENCE」の活動についての提言
- ・映画『北朝鮮強制収容所に生まれて』や『神から遣わされた人』を観た感想など

北朝鮮の強制収容所について日頃から思っていたことを気軽にお寄せください。みなさまからの積極的なご投稿をお待ちしております。（字数制限なし、匿名投稿可）

# 北朝鮮、「朝鮮人権研究協会」の報告書を発表

世話人 李恩元 

2014年9月13日、北朝鮮は「朝鮮人権研究協会」の報告書を発表した。同日、朝鮮中央通信は、「今回の朝鮮人権研究協会の報告書は、共和国の人権政策と実状を広く紹介して誤った見解を正し、人権分野での真の協力を図るのに寄与することになるであろう」と紹介した。

5章からなる「朝鮮人権研究協会」の報告書の第1章では北朝鮮の「人権保障制度」について、第2章では「人民の人権享受実態」について（無駄に）詳細に述べられている。第3章からの内容は、「人権の国際的保障」に関連する北朝鮮の「立場」及び「努力」、「難関」、そして「人権保障の展望」についてである。



北朝鮮がこの報告書を発表したことを受け、多くのメディアでは「異例」であると報じたが、その中身は、北朝鮮がUPRの際に提出したナショナル・レポート(2009年、2014年)などと何ら変わりのないものであり、人権に対する見解もかつての金日成の演説（「人民政権をいっそう強化しよう」、1977年）でみられるように、徹底的に「階級的」観点から（社会権を中心に）集団の権利としての人権のみを認めている。すなわち、真の人権の体現者を人民大衆に限定し、人権を「自主的権利」、そして国権（国家主権）とみなしているのである。これらのことは、北朝鮮の人権に対する捉え方がこれまでと同じスタンスであることを明らかにしている。

また人権状況に関する記述も、今までの北朝鮮の人権関連報告書がそうであったように、関連法令の規定を並べたものにすぎない。「思想の自由」についても、チュチェ思想を「共和国の公民であれば誰もがもつ信念であり意志」と表現している。これはどう考えても自由が保障されているとは言えない。

「朝鮮人権研究協会」の報告書で述べられているように、確かに、今日の国際社会では、国や民族によって人権に対する見解や立場が少しずつれているところがある。しかしながら、自国の政治制度や文化に反するからといって一個人（≡他人、他国…）の行動や思想を軽蔑し、弾圧することは、北朝鮮が主張するところの「民主主義」や「人権」にも反する。ここで必要なのは、（相互）理解と寛容であろう。

報告書はまた、諸国にとって人権が他国の自主権をじゅうりんし、内政に干渉するための道具と化することを指摘している。しかしそれは、北朝鮮に対しても同じことが言えるのだ。

北朝鮮が事実を覆い隠そうとしても、世界はだまされない。

北朝鮮が人権をレトリックとして用いても、人権という言葉の力が北朝鮮の人びとに及ぶ日は必ず来る。



# 強制収容所を前面に出す運動が必要

## ——北側の人権報告書を読んで痛感したこと——

副代表 小川晴久 

一週間前の9月13日、北朝鮮当局は、今年2月17日に国連調査委員会（COI）が発表した詳細で、決定的な北朝鮮人権報告書に対抗して95頁（A4用紙、英文）から成る自国の人権報告書を発表した。前アムネスティ本部の極東担当ラジブ・ナラヤンさんがICNKのメンバーに送ってくれたものです。内容は自国内の人権侵害の内容は一言もなく、北朝鮮当局（政府）にとっての人権の意味（定義）、北朝鮮国内で人民の人権がどのような法規で守られているか、国際人権規約にはどのような弱点があるか、アメリカとヨーロッパ（西側諸国）はいかに我体制を廃絶しようと我が国に敵対活動を行っているか、それでも我が国は人権を守るためにいかに努力をしているかを論じている。それだけで、国連COI報告書400頁の4分の1を占める分量にするため、人権状況の実態ではなく、国の体制を守るのが真の人権だということを長々と言い、法律の内容を羅列することで、4分の1にこぎつけたという印象です。気づいたこと、特徴点を箇条書きにして見ます。

### 一、報告主体を政府ではなく、一 NGO(北朝鮮人権研究協会＝研究所)と偽装したこと

北朝鮮に人権研究所なる政府機関があることを、1995年頃アムネスティ本部のニュース・リリースで知った。1995年4月29日から5月4日までアムネスティ本部が平壤に招かれ訪問した時、その相手をしたのがこの研究所の面々であったと報告にあったからです。その後この研究所は私の知る限り表に出ることはありませんでした。ところが今回北朝鮮が国連の報告書に対抗するため人権報告書を発表する（宋事務局長情報）というので、奇異な感じがしていましたが、その報告書の発行主体として再登場したのです。報告書の中で自己紹介していました。1992年8月27日に誕生したこと、会員には裁判官、弁護士、検察官、専門家等100数十名からなるとあります。これを民間機関と自称している所が偽装であって、政府機関と見るべきでしょう。しかし将来真実が明らかになり、その責任が問われた時、一民間団体の人権報告だと言って逃げる余地を作っていると言えます。

### 二、人権とは国家の尊厳である

①人権とは独立の権利である、②人民大衆が真の人権を享受する、③人権とは国家の尊厳である。

盛んに人間の自立、独立が強調される。戦前日本に独立が奪われて、どんなに惨めな思いをしたかが語られる。そして個人の独立を国家の独立に移行させ、主体が集団、国家になる。個々人の人権も言及されるが、国家あつての個の人権となる。

### 三、内政干渉は許さない、“保護する責任”は内政干渉の道具

2005年秋の国連総会で承認された内政干渉の責任ともいふべき“保護する責任”は北朝鮮当局の断じて容認できないものである。この報告書では、アメリカとヨーロッパ諸国の北の体制打倒の道具と規定されている。北の体制打倒行為を“ジェノサイド”と規定し、ジェノサイド（ある民族の計画的絶滅）を許してはならないと高調している。

### 四、国連の北朝鮮人権調査委員会（COI）を口汚く罵る

美辞麗句を並べていたのが、今年2月17日に全世界に報告書を発表した国連の北朝鮮人権COIについて、次のような口汚い規定をする。これには正直びっくりした。忠実に訳そう。

「北朝鮮人権状況に関する調査委員会（COI）即ち、アメリカとその衛星諸国の操り人形は、祖国とその人民を裏切った人間のクズどもの“証言”を根拠にした“報告”を捏造し、世界にばらまいた。“COI”のメンバーは、アメリカとその同盟国に買収された卑劣な人権騒動者たちである。彼らは事実を歪め、尊厳な国家のイメージを故意に変質させた。国連人権理事会は、政治的な圧力を掛けようとするこれらの犯罪者たちとその試みによって捏造された誤った記録に基づいた虚構の“人権状況”について大騒ぎをしている。」

強制収容所の体験者を始めとして、勇気を以て北の人権侵害を告発した証言者を人間のクズ呼ばわりしたことは、今に始まったことではないが、オーストラリアの裁判官出身のカービー委員長やセルビアの人権確立のために闘ったビセルコ女史、インドネシアの検事出身で現在の北朝鮮人権報告者ダルスマンさんらを、事実を歪曲し、北朝鮮国家の尊厳を傷つけた、卑劣な犯罪者であるとしたことは、この報告の主体である北朝鮮人権研究協会が人権というものを全く論ずる資格もないことを、自ら暴露している。一民間団体の報告書に偽装させたこの口汚い言葉は、北朝鮮当局の反人権的・反人道的犯罪者ぶりを却ってよく表している。

### 五、強制収容所や拷問や拉致すら隠し続ける北朝鮮当局に少しの幻想も懐かず、彼らの嫌がる強制収容所問題を絶えず前面に立て、運動を進めよう！

今回の特別調査委員会の回答もふざけている。北朝鮮の人権問題を北朝鮮社会の一般的問題に拡散させてはならない。強制収容所問題を何よりも訴え続けよう。強制収容所廃絶のために、世界は、日本は何をすべきか訴え続けよう！

◆8月22日に、小川晴久副代表の新著『北朝鮮の人権問題にどう向きあうか』が刊行されました。世話人の木村亮が編集したもので、NO FENCEの成果物と言ってもよいでしょう。北朝鮮の人権問題について予備知識のない読者にもわかるように書かれていますので、ぜひ会員のみなさんの力で広めてください。会員のパクホミさんがさっそく感想をお寄せくださったので、掲載します。◆

## 『北朝鮮の人権問題にどう向きあうか』が 私の心にしみた理由

会員 パク・ホミ 

私はフリーのライターをしていた頃、東欧留学中だった北朝鮮のエリート大学生がベルリンの壁崩壊を機に韓国に亡命した直後のインタビューをする機会に恵まれました（月刊『文藝春秋』1990年3月号とTBS「筑紫哲也のニュース23」の特集）。

その時の彼らの証言のなかに、「北韓では、うっかり変なことを言うと、自分だけでなく、家族全員が統制区域に連れて行かれます。統制区域よりも怖い、政治教化所というのもあるそうです。そこではひどい重労働をさせられる」と政治犯収容所についての証言があったにもかかわらず、当時の私は政治犯収容所について調べることをしませんでした。

1992年にはアウシュビッツにも行き、「こんなことは断じて許してはいけない」と肝に銘じていたのに、この20年は子育てに追われ、こんな近くで現在進行形のアウシュビッツがあることに気づこうとしませんでした。

私が北朝鮮の政治犯収容所の詳細を知ったのは、昨年秋に申東赫さんの本を読み、映画を観てからです。すぐにNO FENCEの会員になり学習会に参加し、飲み会にもずうずうしく参加。今では「ホームページが更新されていないけどどうなっているのか？学習会はないのか？」と宋事務局長に催促の電話をかけるほど入れ込んでいます。

そんな私にとって小川晴久副代表の最新書『北朝鮮の人権問題にどう向きあうか』はまさに恵みの雨。乾いた大地に雨がしみこむように、私の心にしみました。

書きだしの「いま世界で最も悲惨な立場に置かれ、最も助けを必要としているのは、北朝鮮の山の中の、5つはあるという強制収容所に閉じ込められている人々である」からして完璧なつかみ！第1章以降も、北朝鮮の人権の現状や、どうしてそうってしまったのか歴史的背景など、知りたかったことが次から次へとわかりやすく書かれていて、最終章では解決に向けた実践を具体的に提案してくれています。

何より、私自身が中学の社会の授業で習って感動した、日本国憲法前文のいちばん好きな部分「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」を根拠に行動を呼びかけるくだり、共感しすぎてクラクラしました。な～んていい仕事をしたんだ、編集者の木村さん！